スマブラメンバーを1つの町に凝縮中

ほーき雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スマブラメンバーを１つの町に凝縮中

【Ｎコード】
Ｎ２６９８Ｚ

【作者名】
ほーき雲

【あらすじ】
五武山市、僕の小説の大半はここが舞台である。だったらスマブラメンバーをここに住ませてみたらどうだろうか？いちいち五武山市に来る必要はない。最初からいるのだから。（笑）
そんなテンションで始まったが・・・。

※スマブラメンバーの他にもとある魔術の禁書目録、塊魂のキャラクター、さらに一部オリキャラも登場します。

プロローグ（前書き）

予告編の続きです。見てない方は活動報告のアーカイブをご覧ください。

プロローグ

ある日、ほーき雲は立ち上がった。

ほーき雲「スマブラメンバー全員探すって絶対1人じゃきつい。しかも五武山市っていう広い場所に散らばっちゃってるんだもん。」

実は全員ほーき雲の近所にいるのだが・・・。

ほーき雲「誰かに救援要請しよう。」

マスターハンド「あれ？ほーき雲からメール？」

クレイジーハンド「ほーき雲からメール？」

D「ほーき雲からメール来たよ。」

『【救援要請】五武山市内に散らばったスマブラメンバーを全員僕の家の近くに集合させてください。僕1人じゃ足りません。よろしくお願いします。』

ちなみに、Dって何だ！？って思った人は大規模な逃走中にて詳細を知ることができます。

マスターハンド達「探すか！」

全員ほーき雲に協力するようになった。

みんなほーき雲の家から離れたところに行った時、スマブラメンバーは・・・。

リンク「みんなどうする？」

リュカ「家でゲームやる！」

ルイージ「４人１組になって分かれよう！」

全員「賛成！」

こいつらが家にいる限り、ほーき雲達はスマブラメンバーを１人も見つけられないだろう。

続く

ミサカ捜索隊（前書き）

どうなると思いますか？

ミサカ捜索隊

ほーき雲はスマブラメンバーを探す途中、ある少女に出会った。

ほーき雲「ちょっと打ち止めちゃん。人探しに協力してくれない？スマブラメンバーを探しているんだけどね。この五武山市のどこにいるのかわからないんだ。そこで君を含めた９９７０人でスマブラメンバー達を探して欲しいんだ。」

打ち止め「それじゃ、全妹達（シスターズ）に指示してみる。ってミサカはミサカは了解してみたり。」

その瞬間、いきなり９９６９人の人が現れた。しかも全員全く同じ服装、全く同じ体型である。

妹達（シスターズ）。

それはある電撃使いのクローン体である。２０００＋１体が造られたが、そのうち１００３１体はある『最強の超能力者』によって殺されている。

ちなみに、＋１体というのは制御個体で、ほーき雲が出会った少女のことである。

ほーき雲「これだけいれば全員見つかるだろう。」

打ち止め「でも、ミサカは行かないよ。ってミサカはミサカは自分の参加だけは断ってみたり。」

ほーき雲「十分だよ。９９６９人もいるのはありがたい。さらに僕もいれてマスター達もいれて９９７３人。これで見つからなかったらヤバイよね。」

そして夕方。

ほーき雲「かなり疲れた・・・。見つかった？」

検体番号１２３４５「すみません！見つけたのですが逃げられました。とミサカは失敗報告をします。」

ほーき雲「どこで見つけたの？」

検体番号１２３４５「ちょうどこの家の隣ですよ。とミサカは報告します。」

ほーき雲「・・・え？」

検体番号１２３４５「ですから、この家の隣でマリオと思われる赤いおっさんを見つけました。とミサカは再度言います。」

ほーき雲「・・・まさかみんなもうここに住んでるの？」

検体番号１２３４５「その可能性が一番高いです。とミサカは脳内の計算により当然の答えを出します。」

ほーき雲は隣の家をノックしてみた。

マリオ「あっ、ほーき雲だ。ゲームしたいの？」

ほーき雲「・・・君達ここに住んでたのね。他の人達は？」

マリオ「みんなこの近くの家に住んでるよ。」

ほーき雲の力は抜けてしまった。その後、どうやって夕御飯を食べて、眠りについたのか覚えていなかった。

続く

ミサカ捜索隊（後書き）

いきなりスマブラ以外のキャラクター出しやがって・・・。

市長が死んだ。（前書き）

いきなり何があったんだ！？

市長が死んだ。

翌日

ほーき雲「ああ、よく寝た。」

リンク「こっちはお前の家に連れていくの大変だったんだぞ。いきなり気絶しやがって。」

ほーき雲「すぐ隣だろうが。」

ヨッシー「そうそう、ここら辺に空き家いくつあるの？」

ほーき雲「５０を越えてるって聞いた。」

ピット「だから１人１件でいいんだ。」

ほーき雲「とにかくたくさんあるんだよね。」

新聞社の人「号外！号外！大変なことになったぞ！」

ほーき雲「大変なことってなんだ！？」

ほーき雲は号外新聞を１つもらう。

ほーき雲「なんだってぇーーー！！！」

D「どうしたの？」

ほーき雲「市長が・・・・・死んだ。」

ほーき雲以外「なにぃぃぃぃーーー！！！」

ほーき雲「それでさ、新市長の立候補者がコイツ1人だけなんだけどね。」

ほーき雲以外「はぁぁぁぁぁーーーー！！！！」

ほーき雲「ね。ヤバイだろ。」

ネス「来たばかりなのになんでこうなるの？」

ほーき雲「知るかよ！しかも問題はここじゃねぇ！」

スネーク「じゃあなんなんだよ！」

ほーき雲「五武山市民のほとんどがコイツを支持してるんだよ。」

ほーき雲以外「ヤベェェェェェーーーーー！！！！！」

ほーき雲「ほら、あっちで『ヤツ』が演説してるよ。」

ほーき雲以外「本気か・・・・。」

続く

市長が死んだ。（後書き）

立候補者は危ないやつらしい。

新市長大作戦（前書き）

誰なんだよ！？だいたいわかるかな？

新市長大作戦

ほーき雲「ほら、あれを見ろ。」

ほーき雲が見ているものは・・・。

タブー「これから私タブーが新市長となるのです！皆さんぜひ私に投票をお願い致します！」

ほーき雲「わかっただろ。大声でタブーが演説してるんだ。しかもあいつ以外に立候補者はいない。このままじゃタブーが新市長。となれば五武山市は終わるだろうな。」

リュカ「こんなのどうすりゃいいんだよ・・・。せっかく来たばかりなのに・・・。」

ほーき雲「方法なら1つある。他の誰かが立候補して選挙に勝つんだ！」

マスターハンド「しかし、それが難しいのは自分でもわかってるんだろ。今のタブーの支持率は最大。そこをどうやって勝つのか思い

付かないんだろ。普通そうだろ。誰が立候補するのかすら決めてないのにな。」

マスターの発言は最もである。しかし、それを否定するかのように発言をした者がいた。

D「もし、僕を含めた昔の仲間たちの中で、『リーダーシップ界の王』と呼ばれる男が立候補したらどうなると思う？」

ほーき雲「そういうやつがいたら苦労しないよ。」

D「そういうやつは実際にいる。しかも遊び、仕事に関わらず最高のリーダーシップを見せる男。そいつが何回仕切っても誰も文句を言わない。しかもそいつの夢は政治家だ。市長になるのも第一歩になるはずだぜ。そいつの夢のため、タブーからこの五武山市を守るため、そいつを立候補させてみないか？」

全員「おおーーーーー！！」

ほーき雲「おい、１つ言っておくぞ。勝てるかわからないのはわかっているが、もし勝ったとしたら、タブーは攻撃するかもしれない。その時のために、選挙当日は戦闘態勢に入っとけよ。」

アイク「そこんとこは大丈夫だぜ。なぁみんな。」

アイク以外「おおーーーーー！！」

D「よし！その勢いだ。それじゃ、やつのところへ行きますか。」

続く

新市長大作戦（後書き）

果たしてどんなやつなのか？タブーが市長になることを止められるのか？

T（前書き）

この小説は文字数の目安を４００～７００文字にしてるから毎日更新できそう。

T

D「おーい。」

???「なんだ、Dじゃないか。」

D「お前、五武山市の市長になれるとしたらなりたい？」

???「そりゃなりたいさ。地方自治でもいいからやってみたいもんだな。ところで、たくさん人を連れてきたな。どうしたんだ？」

ほーき雲「突然市長が死んで、新市長立候補者がタブーっていう悪いやつしかいないんです。」

???「そりゃいけねぇ。僕が新市長立候補してやる。ちなみに、僕の名前はTだ。」

ほーき雲「T？Dに続いてTですか？」

T「そうだけど？」

ほーき雲「おいD。これはどういうことだ？お前の仲間はアルファベット1文字のやつしかいないのか？」

D「うーん。それが大半を占める。でもそれ以外もいることにはいる。」

ほーき雲「突然だけど例え話しようか～。例えば、僕がマルスに腹が立ったとして。」

マルス「なんで俺なんだよ。」

ほーき雲「僕がマルスをボコボコにしたとする。この小説を読んでいる人にはマルスが好きな人が若干いることにはいるんだよ。」

マルス「なんで若干しかいないんだよ。」

ほーき雲「だけど君はオリキャラだから君のことが好きなやつは超不人気マルスよりも少ないってことになるんだな。」

D「それがどうしたのかな？」

ほーき雲「つまりマルスよりも強力に痛めつけてもいいってことになるんだよ。」

D「なんで何気なく武器持ってるのかな？」

ほーき雲「僕だって武器くらい持つんだよ。さぁどうする？」

D「そもそもなんでこんな目にあっているのかわからな・・・・」

ドカーン！

Dは奇跡的に生きていた。

ほーき雲「もっとまともな名前のやつを友達にするように。別に今の仲間を見放せとは言わないから。」

D「また今度紹介します。」

何はともあれ、新キャラのTと共にタブーの新市長阻止作戦が始まった。

続く

T（後書き）

Dはいい人なんですよ。今回ひどい目にあっただけで。

みんなで作り上げる作戦

ほーき雲たちは選挙に向けて頑張っていた。立候補するのはTだけだが、ほーき雲やスマブラメンバー達には絶対にTを新市長にしなければならない理由があった。彼を市長にできなければタブーが市長になるのだ。

ほーき雲「僕達も協力してるし、Tも演説がんばっているし、なんとか新市長になれるかな。」

D「僕だってちょっとケガしてるけど、Tの直接的な友達としてしっかりフォローしていかなくちゃ。」

ほーき雲「よくちょっとのケガで済んだな。」

ほーき雲達は、Tが新市長になるために、タブーが新市長になるのを阻止するために、2つの思いを込めてポスターの貼り付けを始めとする手伝いをしている。

選挙前日

T「きっと大丈夫。みんな頑張ってくれたじゃないか。タブーがなんだ。あんなやつを市長にはしない。」

ピット「頼もしい。」

ほーき雲「なあ、みんな頑張ったもんな。タブーなんかに負けないよな。」

全員「おおーーーーーー！！」

ほーき雲「あとは結果を残すのみだ！」

続く

みんなで作り上げる作戦（後書き）

次回は選挙本番。Ｔか？それともタブーか？

選挙中、役所前

ほーき雲達は五武山市役所に来ていた。・・・と言っても来ているのはほーき雲、D、Tの3人だけ。スマブラメンバーまで全員で来られたらすごいことになるからだ。

ほーき雲「次々と人が市役所を出入りしている。みんなで投票してるんだね。」

D「あれ？タブーも来たぞ。」

タブー「おや？もしかして突然現れた2人目の立候補者とは君のことかなほーき雲君。」

ほーき雲「僕じゃない。こいつだ。」

ほーき雲はTの腕をつかんで言った。

タブー「知らないやつだな。」

ほーき雲「お前、ポスターはちゃんと見ろ。市のあちこちにTって書いてあるだろ。どこにほーき雲の名前があった？言ってみな！」

タブー「こんなことで強気になりやがって。俺がそいつを知って無かろうが、選挙で勝てばいいのだ。」

T「お前みたいなやつには負ける気がしないな。協力ということを知らなそうだ。」

タブー「何を言おうと俺の演説は大人気さ。このままだと俺勝つよ。勝って恥かかせちゃうよ。」

ほーき雲「やってみな！」

役人「これより投票を終了します。得票計算までしばらくお待ちください。」

ほーき雲「さぁ、投票が終わった。あとは結果だけだぜ。」

続く

選挙中、役所前（後書き）

これ一応コメディーだよね？本気でいがみあっちゃったりバトルしたり・・・。

5倍

役人「選挙結果が出ました！T氏がタブー氏の約5倍という差で勝ちました！」

全員「やったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！」

タブー「許せない・・・許せないぞ！！」

タブーが暴れだした。

ほーき雲「予想通り、とことん裏切らないね。スマブラメンバー達。今が腕のみせどころだぜ！！」

スマブラメンバー一斉にタブーに突撃。

しかし、それで降参するタブーではない。必死で抵抗してくる。

フォックス「スマートボム！」

ルイージ「ファイアジャンプパンチ！」

あちこちから攻撃が飛んでくる。やはり人数では勝てないのだろうか。

ネス「スマッシュボール！」

リュカ「スマッシュボール！」

ほーき雲「さぁやっちまえ！！」

ネス・リュカ「ＰＫスターストーム！！」

無数に降る青と黄色の隕石。それをタブーは何回も当たっていく。

タブー「絶対仕返ししてやる！！絶対だぞ！」

タブーは一応去ってった。

全員「タブーを倒したぜ！」

そしてタブーは

タブー「スマブラメンバーおのれ・・・。」

タブーの近くに白っぽい男が現れた。

タブー「あいつ殺せば少しはスーッとするかな・・・？」

タブーは白っぽい男に襲いかかる。

その瞬間の出来事だった。タブーが男に触れた瞬間、はねかえすような力が自分にかかっているのがわかった。

一方通行「なンだお前？」

タブー「お前こそ何者だ！」

一方通行「何者だだと？ならば問題です。学園都市最強のレベル５といえば誰でしょうか？」

続く

5倍（後書き）

一方通行、読み方は『アクセラレータ』です。

一方通行（アクセラレータ）（前書き）

敗北したタブーのもとに現れた一方通行（アクセラレータ）。どうなるでしょう？

一方通行（アクセラレータ）

一方通行（アクセラレータ）「俺をナメンなよ三下ァ！」

タブー「お前が何者かは知らないが、俺がここで退く訳ねぇだろ！」

一方通行「ならばここで問題です。この俺、一方通行（アクセラレータ）は一体何をしているでしょうか？」

タブー「知るか！」

タブーは構わず一方通行に攻撃する。何発も何発も。撃ちまくるが、一方通行は全ての攻撃を自分に触れた瞬間にはねかえしている。

タブー「お前、反射してるのか？」

一方通行「残念。ちょっとおしいけど、俺のしていることとは違う。」

否定された。

一方通行「答えはベクトル変化。運動量、熱量、電気量。あらゆるベクトルを触れただけで変化できる。」

タブー「つまり、攻撃は当たらないって訳か。・・・・ビーム系ならね！」

タブーは今度は一方通行に体当たりをしてきた。

一方通行「こりねェやつだなァ。しょうがねェ。３０倍で反射してやるよ！あばよ三下ァ！！」

タブーが一方通行に触れた瞬間、タブーはすごい勢いで吹っ飛んだ。こうして、タブーを巡った五武山市の危機は無事ハッピーエンドを迎えたのだった。

その頃、ほーき雲の家は

ほーき雲「おっと、タブーが吹っ飛んでる。２度と来るなよ～。さぁ、明日から楽しい日常生活を送るぞ！絶対に空き家村とは言われないような愉快な場所にしてやるぞ！」

続く

一方通行（アクセラレータ）（後書き）

次回は新しい章に入ります。

大騒ぎしても近所迷惑にならない

タブーがいなくなり、平和な五武山市。しかし、空き家村では大騒ぎが起こっていた。

ほーき雲「いいか？ここは空き家村だ。そこに僕達は住んでいる。つまり、この周辺には僕達しかいないことになる。それはどういうことか。答えは大騒ぎしても近所迷惑になりにくいってことなんだぜ！さぁ、叫べ騒げの大盛り上がり大会を始めようぜ！！」

全員「おおーーーーーーー！！！！」

ほーき雲「まずは大食いゲーム！！ルールは簡単。カービィかヨッシー。どちらがより多く食べるかを賭けろ！！ちなみに僕はカービィに賭けるよ！」

ゼルダ「私はヨッシーに賭ける。」

ネス「僕はカービィに賭ける。」

カービィ「絶対負けない。大食いは僕の大事な特徴。それで負けたらカービィの名前が傷つく。」

ヨッシー「よく言うじゃん。こっちだって伊達に長い舌出して食いまくってる訳じゃないんだよ！」

ほーき雲「よーい・・・・・スタート！」

カービィ・ヨッシー「いくぞ！！」

続く

限界が知りたい。

ほーき雲「カービィに賭けた人も、ヨッシーに賭けた人も、みんなで食べ物を戦場に運びましょう。やはり用意した食べ物を全部押し込めるのは無理でした。」

全員「正直面倒だけどまあいいよ。」

こうして、みんなで大量の食べ物を運んで行く。たぶんみんな同じことを考えているだろう。

『食い過ぎだよ！普段の食事では全然満たされてないわけ！？』

そして、『戦場』に着いたほーき雲達は見た。

食べ物が無くなっている。しかも、両者共に次の食べ物を少しイライラしながら待っている。

ほーき雲「まだ余裕そうですね。」

カービィ「当たり前だよ！」

ヨッシー「早くみんなが持ってきた食べ物ちょうだい！」

ほーき雲「はい。」

テーブルに置いた瞬間、両者共に恐ろしいスピードで食らいついていく。

ルイージ「ほーき雲、もうこれで最後だよ。」

ルイージの発言を一切無視し、最後の食べ物も全て食べてしまった。

ほーき雲「これ以上食べ物は用意してないので、『2人で僕に勝った』ということにします。」

こいつらの食事量は計り知れない。

続く

限界が知りたい。（後書き）

タイトル通り、こいつらの食事量の限界が知りたい。

なお、これからこの小説のみ感想返信担当を作ります。（スマブラメンバーじゃないけど・・・）

奇数日→一方通行（アクセラレータ）　偶数日→打ち止め（ラストオーダー）

が基本ですが、時々臨時で代役が担当することもあります。その時は後書き欄にちゃんと書きます。ちなみに今日は１５日なので今日中に書いた感想は一方通行が返信します。

新登場

ほーき雲「突然ですが、新メンバーの登場です。ただし、知らない人が多いと思うので、簡単に紹介します。」

新メンバーを連れてきたほーき雲。

ほーき雲「また、これより『空き家村グループ』という名前が誕生します。」

リュカ「早く新メンバー呼んでください。」

ほーき雲「新メンバーはこちら、塊魂の王子とイトコハトコとルーキーの皆さんです。」

王子「よろしく〜。」

エース「面白そうだね。」

変わったキャラクター達がたくさん現れ、スマブラメンバーも注目している。そして中でも注目を浴びていたのがディップである。

ポポ「すごい！あちこちカラフルに光ってるよ！」

ディップ「どうもディップです。よろしく〜。」

？？？「ところで皆さんは僕の存在に気づいていますか？」

マスターハンド「わっ！！すぐ隣に透明人間！！」

ジャングル「ジャングルです。僕は透明なのでそこんとこよろしくお願いします。」

ほーき雲「こうしていいメンバー集まったでしょ。他にも特徴的なキャラクターがたくさんいるからちゃんと交流してみることをおすすめするよ。最後に空き家村グループの意味を説明します。」

突然結成された空き家村グループ。どういう意味があるのか？それは次回です。

続く

新登場（後書き）

今日は感想返信はラストオーダーがします。

打ち止め「わーいわーい。ってミサカはミサカは空き家村グループに入りたいと思いながらも喜んでみたり！！」

空き家村

空き家村。

原因は不明だが、五武山市のとある場所にたくさんの家が建てられた。しかし、これらに住む人は1人しかいなかった。その1人がほーき雲である。

ほーき雲が住んでる1件を除いて誰も住んでいなかったため、空き家村と呼ばれている。

そこへ今回、スマブラメンバーをこの空き家村の大量の空き家に住ませることにした。

空き家は確かに減った。しかし、まだたくさん残ってるのが現状。つい先日までほーき雲も50件くらいしかないと思っていたが、実際は数えきれないほどある。

ほーき雲はこの空き家村という名前を消すことが目的で、スマブラメンバーに加え、塊魂のイトコハトコ達も住ませたが、まだまだ空き家は残るのが現状。しかし、今までとは違い、住んでるのは1人ではない。住民は少しずつ増やせば良いだろう。と楽観的に考えられるようになった。空き家村グループとは、空き家村という名前を消すためのグループである。（空き家村という名前が消えた時、グループ名も変える予定らしい。）

ほーき雲「それじゃ、新住民探して来るよ。」

ジュン「いってらっしゃいほーき雲。」

バンバン「絶対空き家村なんて名前消してやろうね！」

空き家村と呼ばれるエリアを抜けた瞬間、ほーき雲はつぶやいた。

ほーき雲「空き家村という名前もそうだけど、このホールの名前も変えてやりたいよな。」

そこには、ほーき雲がスマブラメンバー達を集合させるために使っているホールがあった。

そして、そこには『境界ホール』と書かれていた。

続く

空き家村（後書き）

次回は、ほーき雲が外出中の時のスマブラメンバー達の生活をお送りします。

塊魂キャラクタースマブラ初挑戦

フーミン「炸裂～♪♪」

フーミン以外「いやいや、全然意味わかんないから！！」

フーミン「い～じゃん☆」

マリオ「ねぇ、塊魂のみんな。スマブラXやってみない？」

王子「やってみたい！」

1回戦

ディップ　使用キャラ　ネス

ミソ　使用キャラ　アイスクライマー

オデコ　使用キャラ　ヨッシー

イチゴチャン　使用キャラ　ピーチ

エリア　マリオサーキット

3個ストック制

スタート！

王子「僕の番はまだなのかな！？」

フーミン「ま～ま～★」

王子「なんなんだよお前！」

フーミン「フーミンだけど？」

王子「・・・。」

ディップ「ＰＫフラッシュも当たると強いけど当たりづらい。」

ミソ「ヤバイ！ナナがやられた！！ポポだけじゃかなり不利だ！」

オデコ「なんか虹色のボール取ったら羽生えたよ！」

イチゴチャン「ギャー！！」

イチゴチャン残りストック２

デイップ「なんだ？爆弾箱？遠くからＰＫサンダー当ててみよう。」

ボカーン！！

ミソ・オデコ「何するんだ！！」

ミソ・オデコ残りストック２

ディップ「ここ車走ってるから避けるのつらい。」

イチゴチャン「何これ？Ｂって書いてあるけど。」

イチゴチャンはそれを投げた。

イチゴチャン「あれ？何も起こらないよ。」

ディップ・ミソ・オデコも近寄る。

その時！

ババババババーーーーン！

ルイージ「それはスマートボムの不発弾だね。」

ディップ残りストック2

ミソ・オデコ・イチゴチャン残りストック1

続きは次回

塊魂キャラクタースマブラ初挑戦（後書き）

打ち止め「感想待ってまーす。ってミサカはミサカは呼びかけてみたり！」

新住民はホームレス

ディップ「虹色のボール取ったぞ！」

ディップ以外「まずい！！」

ディップ「ＰＫスタースストーム！！」

ミソ・オデコ・イチゴチャン残りストック０。よってディップの勝利。

マーシー「２回戦やりたい！」

ビヨンド「あれ？ほーき雲帰ってきた。」

ほーき雲「ただいま。新住民連れてきたよ。」

相原「相原雄介です。よろしくお願いします。」

ほーき雲「ここには空き家がたくさんあるから君も住んでいいんだよ。」

相原「非常に嬉しいです。ついにホームレス脱出できて嬉しいです。」

ほーき雲「どうしても家が欲しいという人なら住んでくれると思ったんだ。そうすればお互い嬉しいしね。」

相原「なんかいろいろいますね。」

ほーき雲「こいつらはスマブラメンバーと塊魂のイトコハトコ達。とにかく面白いやつだらけ。ホームレスのつらさなんて感じさせないぞ！」

ニック「空き家村も勢いがすごくなってきたね。」

ほーき雲「絶対空き家村なんて呼ばせないほどの盛り上がりを見せてやるんだ！」

？？？「どこだ・・・裏切り者・・・。」

続く

相原雄介

相原「お願いです。僕がいるのか聞かれたらいないと言ってください。僕は狙われているんです。」

ほーき雲「狙われている？まぁ大丈夫だよ。ここには空き家しかない。ここに住んでない人は来ないはず。」

相原「でも、家がたくさんあるとしたら、かくまってると思われれる・・・。」

ほーき雲「世間にはここは空き家だらけということになっている。空き家にはかくまってくれる人どころか、かくまってくれない人すらいないんだからな！」

フーミン「僕がいるからな！」

ほーき雲「バカフーミンみたいな面白いやつもいるし。君も空き家村の住民。そして空き家村グループの一員だ！」

相原「ここなら安心して暮らせる気がするよ。ありがとう！」

一方通行（アクセラレータ）「おい、ほーき雲！」

ほーき雲「一方通行？まあいいや。遊びに来たんだね。」

ほーき雲は外に出た。

一方通行「遊びにじゃねェ。最近この辺りに危険なやつがいるから

気をつけろって言いに来ただけだ。」

ほーき雲「一方通行って親切なところもあったんだ。」

一方通行「そこに触れたら殺す。」

ほーき雲「いいや。どうせなら新住民の相原君を家に連れていくのついてくる？」

相原も外に出た。

一方通行「そんなもン行かねェよ。」

その時。

パン！

突然銃が遠くからこちらに撃たれた。

幸い、弾は一方通行に当たり、そのまま反射された。

一方通行「言ったろ。危ねェって。」

相原「もしかして僕を狙ってるやつらかも・・・。」

続く

相原雄介（後書き）

感想ください。

武装無能力集団（スキルアウト）

一方通行「なァ、武装無能力集団（スキルアウト）って知ってるか？」

ほーき雲「学園都市にいる不良みたいなやつらでしょ。基本的には学園都市にいるわけで、学園都市の外には影響は出ないはずなんだけど。」

一方通行「そのスキルアウトの１つである『新倉団』ってやつらが学園都市の外に出てきたわけだ。」

ほーき雲「でもスキルアウトって学園都市の外に出てきたらただの不良だよね。」

一方通行「そォなンだけどな。新倉団は学園都市の内外共に暴れまわっているかなり大人数の集団、例外中の例外だ。」

ほーき雲は相原が怯えているのを見た。

ほーき雲「もしかしてお前、新倉団に追われているのか？」

相原はうなずいた。

ほーき雲「これで理屈がわかった。なぜ市民の大半が誰も住んでいないと思っている空き家村にわざわざ現れたのか。」

一方通行「そもそも五武山市の人間ですらなかった。それに学園都市は閉鎖的な環境だ。それなら知らなくてもおかしくない。」

ほーき雲「こうなれば余計お前についてきてもらわなきゃ危険だ。僕に戦力はない。頼む。ついてきてくれ。」

一方通行「元々新倉団をどうにかしろって黄泉川(よみかわ)に言われてるンでね。やつらの獲物ならいずれこいつの近くに現れる。行くぞ。」

黄泉川愛穂(よみかわあいほ)。学園都市の警備員(アンチスキル)の1人であり、一方通行と打ち止め（ラストオーダー）に住居を提供した人物だ。

ほーき雲「それじゃ、行こう。相原、安心しろ。こいつは強い。新倉団からも守ってくれるよ。」

一方通行「壊すのは得意だが守るのは苦手だぞ。まァ新倉団を叩き潰すって考えれば同じだ。」

相原「2人共、ありがとう。」

続く

武装無能力集団（スキルアウト）（後書き）

もう『一方通行』読めますよね？今回は１回も読み仮名書きませんでしたが大丈夫ですよね？

新倉団

スマブラメンバー「俺達も行くぞ！」

ほーき雲「それはありがたいけど、全員で来たら人数多すぎるし、この家も守ってほしいから・・・。それじゃＭＯＴＨＥＲの２人だけついてきて。他の人はこの家の護衛を頼む。」

ネス・リュカ以外「任せとけ！」

こうして、相原を家に案内する。案内するだけならこんなに人はいらないが、スキルアウトの標的となれば話は別である。

ほーき雲「でも、やっぱり謎だな。スキルアウトが学園都市の外に出てくることに何の目的が？」

一方通行「考えられるのは相原とは別に学園都市の外の人間を狙っているか、相原の方が学園都市の外へ出たために追ってきたか。」

相原「確かに僕は自分から学園都市の外に出た。」

一方通行「まだ問題はある。なぜ人数が多いンだ？ざっと見ただけで３０人いるな。新倉団の特徴、相原がレベル０であることを考えると１０人いれば十分だ。」

ほーき雲「そりゃあ逃げたやつを探すとなれば人数は多ければ多いほど有利だ。」

一方通行「しかし、新倉団のリーダー、新倉はレベル４の人物探索（パーソンサーチャー）

の持ち主。相原の居場所は国内なら簡単に探せるだろォな。まァ1度に1人しか探せないがな。」

ほーき雲「待てよ。そしたらスキルアウトの定義はどうするんだよ。スキルアウトとは武装無能力集団。レベル0の不良の集まりだろ。」

一方通行「それが、最近レベル3やレベル4がスキルアウトをまとめることがあって大変なンだァって黄泉川が言ってたぞ。」

ほーき雲「厄介だ・・・。」

続く

新倉団（後書き）

感想ください。

相原を家に連れていった

ほーき雲「ここが君の家だよ。」

相原「襲われなかったみたいでよかったです。」

一方通行「だが、いつ来るかわかンねェぞ。新倉はお前の居場所を知ってるンだからな。」

相原「ホームレスで新倉から逃げるのは大変でした。外で寝るのでいつ見つかってもおかしくない状態で、ろくに寝ることができませんでした。でも、これから安心できます。」

一方通行「安心できる訳ねェだろ。新倉はお前の居場所をつかんでいる。俺が護衛をする。ここに一緒に住んで、いつ新倉が来ても大丈夫なようにする。俺はレベル5第一位だぜ。新倉が来たら絶対潰してやる。」

ほーき雲「一方通行だったらなんとかなるよ。相原、お前も一緒にここで楽しもうぜ。」

相原「僕も楽しんでいいのか？」

ほーき雲「いいんだよ。」

相原「僕だってあの人達と一緒に遊びたい！」

ほーき雲「そうか、じゃあな！明日にでも来いよ！」

相原「それじゃ、よろしくお願いします。一方通行さんですよね？」

一方通行「おォ。よろしくな。」

相原「この部屋の間取りだと・・・。あなたは手前の部屋。僕は奥の部屋で良いですか？」

一方通行「好きにしろ。」

相原「じゃあそうします。何もないと良いですね。」

新倉「うまくいってるようだな。」

したっぱ「そのようですね。」

新倉「・・・と・・・は絶対に殺す。」

新倉は2人の人物を殺そうとしている。それは誰なのか！？

続く

相原を家に連れていった（後書き）

感想待ってます。

あの日以来、新倉は来なかった（前書き）

スマブラメンバー役目少ないな・・・。スマブラメンバーを1つの町に凝縮中なのに。

あの日以来、新倉は来なかった

相原が空き家村に住んでから数日がたったが、新倉団は特に何もしてこなかった。あの日を除いては・・・。

それは相原を家に入れた直後、相原と一方通行と別れて自分の家に帰ろうとしたほーき雲、ネス、リュカ。そこへ新倉団が現れた。

新倉「やぁ、早速だが、君達を殺す。」

新倉団は一斉に攻めてきた。

ほーき雲には戦力がない。よって、ネスとリュカが立ち向かう。

リュカ「ＰＫフリーズ！」

あちこちで凍っていく新倉団。

ネス「ＰＫファイヤー！」

一方、燃えているやつらもいた。

新倉「もしかして・・・あいつらは能力者なのか？」

確かにネスとリュカは超能力を使って戦っている。しかし、ネス達のそれと学園都市のそれは少し違うが、新倉にそれがわかる訳ない。

あっけなく新倉団のしたっぱはやられてしまった。

新倉「今回は逃げるぞ！」

新倉は去っていった。ほーき雲達は追うつもりはなかった。

その後、ほーき雲達はいつものように家に帰り、眠りについた。数日たっても新倉団は相原もそれ以外の誰も襲って来なかった。

続く

あの日以来、新倉は来なかった（後書き）

次回は余りにも新倉が来ないので、みんなで盛り上がります。あと感想待ってます。

ワリオ接待（暴力）ゲーム（前書き）

短いです。

ワリオ接待（暴力）ゲーム

余りにも何も起こらないため、ほーき雲はみんなで盛り上がろうと言い出してきた。

ほーき雲「まずはワリオ接待ゲームね。」

ワリオ以外「そんなのやだ。」

ワリオ「さっさとしろ俺の部下ども。」

ほーき雲「誰が最初にやる？」

当然立候補する者はいない。

ワリオ「言い出しっぺのほーき雲がやれよ。」

ほーき雲「しょうがないなぁ。僕の出番だね。」

そう言って、ほーき雲はワリオを『殴った』。

ワリオ「おい！何するんだよ！」

ほーき雲「接待＝暴力じゃないの？」

ワリオ「騙された・・・。」

ほーき雲「そもそも本当に接待なんてすると思ったの？そしたら君はフーミン以上にバカだね。」

ワリオ「そもそも俺が何したって言うんだよ！」

ほーき雲「それは殴りながら教えてあげよう。」

続く

ワリオ接待（暴力）ゲーム（後書き）

ワリオが何をしたかなんて想像すれば正解します。

ワリオ（前書き）

２４日１７時に自動投稿です。この時、作者は学校で部活の大掃除をしていると思います。

ワリオ

ワリオ「俺が何をした！？」

ほーき雲「何も言わなかったけどお前ひどすぎだよ。塊魂のキャラクター呼んだら屁こくし、相原を連れてきたらニンニク臭いし。」

ワリオ「だからどうしたってんだ。おならの臭いで文句言うやつは俺が罰を与えてやるよ。」

ほーき雲「お前が罰を受けろーーー！！」

ワリオ「うぎゃぁぁぁぁぁ！！」

ほーき雲「何か言うことは？」

ワリオ「俺は悪くない。前言撤回しろ！」

ほーき雲「どうやらこいつはまだ反省してないようだね。みんな、こいつボコボコにしていいよ。」

こうしてワリオはボコボコにされました。めでたしめでたし。

続く

ワリオ（後書き）

２５～２８日までは、作者が旅行中のため、事前に書いたものを毎日１７時に自動更新します。ただし２８日は早朝に帰宅するため通常投稿になります。

新住民

ほーき雲「今日は新住民が来るよ。ちなみに女性だよ。」

男達「おお！！」

ほーき雲「ちなみに名前は鈴科百合子（すずしなゆりこ）っていうんだよ。」

マリオ「鈴科百合子かぁ。美人かなぁ。」

ファルコン「そういえば、相原と一方通行はどうした？」

ほーき雲「今日は集まりたくないから家にいるんだってさ。」

スネーク「新住民いつ来るんだ？」

ほーき雲「もう少しで来ると思うよ。」

女性新住民の登場により盛り上がる男性陣。しかし、このあととんでもないトラブルが発生する・・・。

ほーき雲「（ここまで期待させといて大丈夫かなぁ。）」

リンク「その鈴科百合子はどの作品の人？」

ほーき雲「とある魔術の禁書目録だよ。」

リンク「とある魔術の禁書目録だったら御坂美琴がよかったなぁ。」

マリオ「俺はインデックス派だな。」

ほーき雲「君達の好みは聞いてないし、来るのは鈴科しか来ないし。」

リンク「俺は鈴科なんてやつ知らねぇよ。」

ほーき雲「知らない方が良いじゃん。可愛いかな？とか、俺に惚れるかな？とかってドキドキするでしょ？」

マリオ「最初から可愛いってわかってる方がいい。」

その時、ドアをノックする音がした。

ほーき雲「お待ちかね。新住民の鈴科百合子が来ましたよ。誰かドア開けに行ってきて。」

男性陣「俺が行くんだぁぁぁぁーーー！！」

鈴科百合子がどんな人なのか知りたい男性陣は我先に玄関へ向かって行く。

鈴科百合子の登場は次回に持ち越しです。

続く

新住民（後書き）

鈴科百合子、暇があれば調べてみてください。どんな人かわかりますよ。

鈴科百合子

ファルコン「これが・・・鈴科百合子？」

マリオ「イメージと違う・・・。」

フォックス「おい、ほーき雲！お前このこと知ってただろ！」

ほーき雲「え？何のことかな？」

フォックス「とぼけるな！この鈴・・・」

までしゃべった瞬間、何かに頭をつかまれていることに気づいた。

フォックスが振り返ると・・・。

鈴科「あァン？俺がどォかしたかァ？」

スネーク「しかも一人称俺だし・・・。」

そこには、女装した一方通行の姿があった。

ファルコ「おい一方通行、女装したのに口調がいつものままじゃ意味ないだろ。口調も少し女っぽくした方が・・・。」

鈴科「あァン？俺は鈴科百合子だ。一方通行なンて名前じゃねェ。」

マリオ「こりゃ一方通行に直接問いただしてみようぜ。」

ほーき雲「相原と一方通行は今日は家にいるらしいよ。」

男達「よし、一方通行覚悟しろよ！！」

続く

鈴科百合子（後書き）

ちなみに鈴科百合子はオリキャラではありません。

相原宅強制訪問

鈴科「でさァ、その一方通行ってやつのところ行ってなンになるンだ？」

ほーき雲「本当に別人なのか確かめる。もし本当に別人だったら二人で並んでもらってどのくらい似てるか調べる。」

マリオ「これで同一人物だったらただじゃ済まさないぜ。

鈴科「だから別人だって言ってンじゃねェか。」

全員は相原と一方通行の家に着いた。

ほーき雲「よし、確かめに行くぞ。」

ほーき雲はドアをノックする。しかし、反応がない。仕方なく、勝手に入った。

ほーき雲「なんだよこれ・・・。」

一方通行が、あの学園都市最強のレベル5が、倒れていた。

ほーき雲「おい、一方通行！！」

一方通行「ン・・・・。」

ほーき雲「まだ意識はあるのか！？どうしたんだ！？」

一方通行「イマジン・・・・ブレイカー・・・・。」

ほーき雲「幻想殺し（イマジンブレイカー）！？どういうことだよ・・・・。」

まさか、あの少年が関わっているのだろうか。

続く

相原宅強制訪問（後書き）

感想ください。

第２４学区（前書き）

ここから先、話題があっちこっち行くのでついてきてください。

第２４学区

幻想殺し（イマジンブレイカー）といえば上条当麻のことを言う。右手で触れた異能の力を打ち消す。それは一方通行のベクトル変換も例外ではなく、絶対能力進化計画が凍結するきっかけになった。

しかし、今回の事件をどうやって彼に関係させるのかわからないというのが今の状況。上条当麻が何の理由も無しに人をこんな状態にするはずがない。

ならば、なぜ一方通行が幻想殺しという言葉を口にしたのだろうか。

一旦、五武山市から離れ、学園都市で起きた新倉団の関わっている事件に視線を向ける。

風紀委員（ジャッジメント）の白井黒子は学園都市の第２４学区に来ていた。

黒子「こんなところがあったんですね・・・。」

ちなみに、学園都市の学区は２３しかないはずである。この第２４学区は上層部でも知らない怪しい空間だ。

？？？「助けてください！」

黒子「あなたたちは？」

白井黒子が見たのは2人の子供。置き去り（チャイルドエラー）だろうと推理する黒子。

？？？「おっ、あなたはいい実験台ですね。」

そしてその後ろから謎の人影があった。

続く

強制進化

五武山市サイド

ほーき雲「相原がいないぞ！どうしたんだ！？」

一方通行「相原が・・・・や・・た・・・・・。」

ほーき雲「相原がやられたのか。今になって動いたか新倉め！」

メタナイト「ちょっと待て。」

ほーき雲「どうした？」

メタナイト「それじゃあなぜ幻想殺しが関わっているんだ？あの少年は無能力者だがスキルアウトになるようなやつじゃない。そこまで説明できるか一方通行。」

一方通行「相原が・・・。」

ほーき雲「相原がどうした！？」

一方通行「ぐあァ！！」

ほーき雲「やっぱり無理そうだな。」

？？？「結局、私の出番って訳よ。」

全員「誰だ！？」

フレンダ「私はフレンダ＝セイヴェルン。相手が幻想殺しなら私がそいつの相手をするって訳よ。」

ほーき雲「ここでフレンダか。僕も知っているけど、まだ上条が敵って訳じゃないよ。」

幻想殺しがどう関わるのか、その情報はまだわからないようだ。

学園都市第２４学区サイド

黒子「実験！？」

？？？「そう、実験。詳しく言えば能力の強制進化だよ。」

黒子はすごい力が自分にかかっていることに気づいた。

黒子「！！」

そして、謎の男にとらえられた3人目を見つけてしまった。

黒子「みんな、３人そろってにげて！！」

？？？？「私はあなたが超心配です。」

黒子「いいから！」

黒子は3人に触れていく。そして全員テレポートされた。ただ、3人共どこへ行ったのかわからない。とにかくかなり遠くまで飛ばしてしまったようだ。能力進化によって遠くまで飛ばしたが、それを意識できるほど体はついていっていなかった。

黒子「こうなれば・・・。」

黒子は最大限の力を使って自分自身をテレポートさせる。

なんとか逃げることには成功した。しかし、ここがどこなのか全然わからない。

黒子「感覚は・・・戻ってますね。ならばここがどこなのかわかれば帰れますね・・・。」

続く

強制進化（後書き）

怪しい研究者は今後出てこない可能性があります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2698z/

スマブラメンバーを1つの町に凝縮中

2011年12月29日13時53分発行